

# 日英語における二重目的語構文の 統語構造について

勝山裕之

## 1. 序論

私は今までに英語の二重目的語構文 (double object construction: 以下 DOC) の統語構造を研究してきたが、日本語の DOC の統語構造も英語の DOC の統語構造と同じように説明されえるのか、ということの本稿において検証してみたい。あらゆる言語に内在する原理が普遍的であるならば、英語の研究において得られた知見は日本語にも適用可能であると予測される。このような視点より、以下において日英語における DOC の統語構造を考察してみたい。

## 2. 日英語の二重目的語構文

英語における DOC とそれに対応するものには、以下のようなものがある。

- (1) a. He gave the girl a doll.
- b. He gave a doll to the girl.
- c. The girl was given a doll.
- d. A doll was given the girl.
- e. A doll was given to the girl.

(Quirk et al.: 1985)

(1a) は DOC であり、間接目的語 (indirect object: 以下 IO) 'the girl' と直接目

的語 (direct object: 以下 DO) ‘a doll’ を含む。この構文は二重他動詞構文 (ditransitive construction) と呼ばれ、IO は通常は有生であり、DO は通常は無生である (Quirk et al.: 1985)。また、IO と DO は繫辞関係にはない (Quirk et al.: 1985)。(1b) は与格構文 (dative construction: 以下 DC) であり、(1a) の IO が前置詞を伴い、後置されている。(1c) は (1a) を受動化したものであり、IO が受動文の主語になっているので、間接受動文 (indirect passive) と呼ばれる (Zandvoort: 1975<sup>7</sup>)。 (1d) は (1a) を受動化したものであり、DO が受動文の主語になっているので、直接受動文 (direct passive) と呼ばれる (Zandvoort: 1975<sup>7</sup>)。 (1e) は (1b) を受動化したものである。(1e) は (1d) とほぼ同義であるが、(1e) の方が普通である (Quirk et al.: 1985)。

上で見たように、理論上は (1a) の受動文は2通りある。しかし、実際にはその使用には制約がある。Quirk et al. (1985) は、間接受動文と直接受動文の両方が可能な場合には、(1b) のような間接受動文の方が普通であるとし、また Palmer (1988<sup>2</sup>) は、間接受動文しか起こりえないとしている。<sup>1)</sup> この理由は、もの (無生のもの、OO) よりも人 (有生のもの、IO) の方に関心が寄せられる、ということにあるようである (Jespersen: 1933)。Czepluch (1982) は間接受動文と直接受動文の文法性に関する何人かのインフォーマントの判断を示している。

(2)	A	B	C	D
a. Mary was given the book.	ok	ok	ok	ok
b. The book was given Mary.	ok	ok	ok	*
c. Mary was bought the book.	*	?	ok	ok
d. The book was bought Mary.	*	*	ok	*

上の表の (2a) と (2c) が間接受動文であり、(2b) と (2d) が直接受動文であるが、動詞が give であろうとも buy であろうとも、間接受動文の方が直接受動文よりも文法性が高いということが分かる。以上から分かるように、英語における直接受動文は非文法的であると判断するのが普通であり、言語理論を構築する場合には非文法性を説明するということが重要であるので、本稿では英語における直接受動文は非文法的であるという前提において、議論を進める。

日本語の DOC とそれに対応するものには、以下のようなものがある。<sup>2)</sup>

- (3) a. 太郎が花子に本を与えた。
- b. 花子が本を与えられた。
- c. 本が花子に与えられた。
- d. 太郎が花子に本をやった/あげた。
- e. 太郎が花子に本をくれた。
- f. 太郎が花子に/から本をもらった。

(3a) は DOC であり、IO「花子に」と DO「本を」を含む。(3b) は (3a) に対応する間接受動文である。(3c) は (3a) に対応する直接受動文である。また、日本語では「与える」という意味を伝える場合には (3d) - (3f) を用いるのが普通であるが、本稿においては DOC の統語構造を扱うのであり、(3d) - (3f) をも扱うとすると、これに伴う意味的・機能的問題をも扱わなければならないので、本稿においては英語の give に相当する中立的な動詞「与える」のみを対象とすることとする。

### 3. 非対称的關係と先行研究

#### 3.1. 非対称的 c 統御關係

Barss and Lasnik (1986) は、DOC においては IO が非対称的に DO を c 統御する、ということを観察している。

- (4) a. I showed John (him)<sub>i</sub> himself<sub>i</sub> (in the mirror).
- b. \*I showed himself<sub>i</sub> John<sub>i</sub> (in the mirror).
- (5) a. I gave no one anything.
- b. \*I gave anyone nothing.

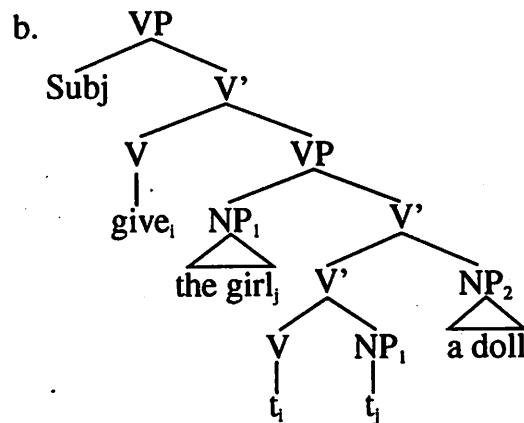
(4) は照応形束縛の例であり、(5) は否定極性の例である。上の例から分かることは、IO は DO の領域内にはないが、DO は IO の領域内にある、すなわち、IO の方が構造上 DO よりも高い、ということである。

## 3.2. 先行研究

### 3.2.1. Larson (1986)

Barss and Lasnik (1986) の非対称的 c 統御関係を考慮に入れ、Larson は以下のような DOC の統語構造を提案している。

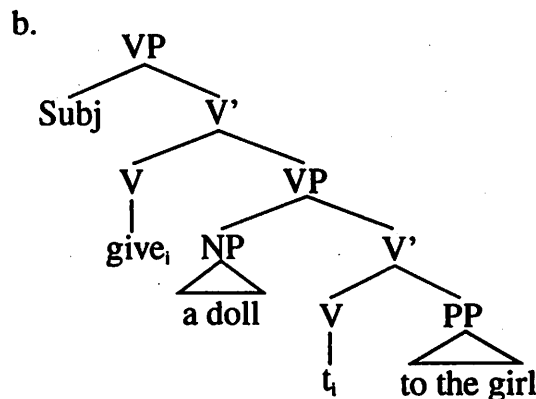
(6) a. He INFL give the girl a doll



(6b)において、V 'give'は下のVP内から上のVP内へ繰り上がる。IO 'the girl'は下のVPの補部から下のVPの指定部へ繰り上がり、構造対格を付与される。姉妹要素がDO 'a doll'であるVはVとして再分析され、DOに内在目的格を付与する。

LarsonはDOCはDCから派生すると仮定し、以下のようなDCの統語構造を提案している。

(7) a. He INFL give a doll to the girl



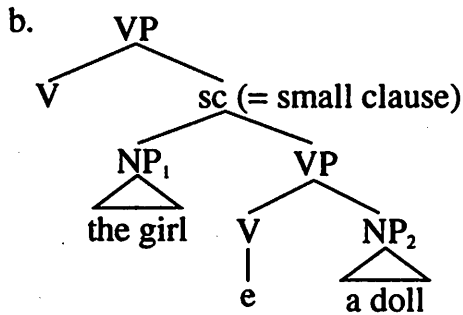
(7b)において、V 'give'が下のVP内から上のVP内へ繰り上がり、目的語 (object: 以下O) 'a doll'に目的格を付与する。

Larson の分析の問題点は、DOC に関わる操作が複雑であるということである。また DOC において、付加部の DO の姉妹要素の V' が V として再分析され、DO に内在目的格を付与する、としているが、付加部に格が付与されるという経験的証拠がなく、これは前提的規定である。

### 3.2.2. Aoun and Li (1987)

Brass and Lasnik (1986) の非対称的 c 統御関係を考慮に入れ、Aoun and Li は以下のような DOC の統語構造を提案している。

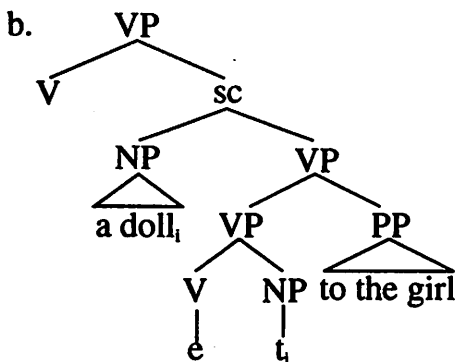
(8) a. He gave the girl a doll. (= (1a))



(8b) において、Aoun and Li は IO 'the girl' と DO 'a doll' の間には意味上の所有関係があると仮定する。上の VP 内の V 'gave' は補部として小節 (small clause) を持ち、IO に格を付与する。下の VP 内の空の V 'e (= empty)' は DO に格を付与する。

Aoun and Li は DC は DOC から派生すると仮定し、以下のような DC の統語構造を仮定している。

(9) a. He gave a doll to the girl. (= (1b))



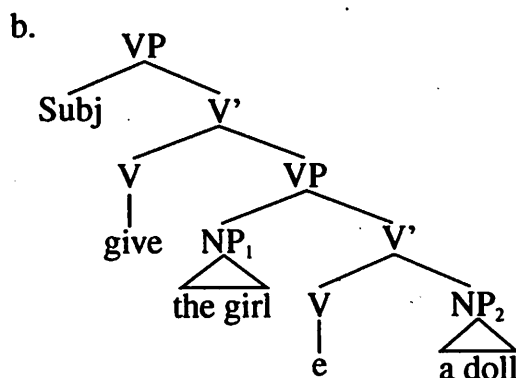
(9b)において、上の VP 内の V 'gave' は補部として小節を持つ。下の VP 内の空の V 'e' は受動化により O 'doll' に格を付与しないので、O が小節の主語の位置へ繰り上がり、V 'gave' が O に格を付与する。

Aoun and Li の分析の問題点は2点ある。まず、VP 内主語仮説を考慮に入れていないということである。次に、上の V の姉妹要素として小節を仮定しているということである。小節とは文と同じ命題内容を持つが主要部を欠き、主語と述語の関係から成るものであり、繫辞関係は持つが、所有関係は持たないものことである。1節においても言及したが、事実 Quirk et al. (1985) は、IO と DO は繫辞関係にはない、としている。従って、Aoun and Li の小節の概念の取り扱いには疑問が残る。

### 3.2.3. Katsuyama (1999)

私はかつて、VP 内主語仮説と、Barss and Lasnik (1986) の非対称的 c 統御関係、Larson (1988) の VP shell 分析、Aoun and Li (1989) の空動詞分析を考慮に入れ、DOC の最も妥当な統語構造であると思われる以下のような構造を提案した。

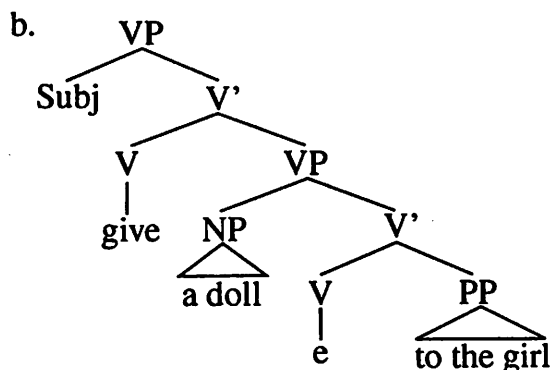
(10) a. He INFL give the girl a doll (= (6a))



(10b)において、VP 内主語仮説に従い、上の VP の指定部に主語の基底位置を設けている。また、Barss and Lanik に従い、IO 'the girl' は非対称的に DO 'a doll' を c 統御している。上の V 'give' は IO を統率し、IO に構造与格を付与する。下の空の V 'e' は格付与のために仮定し、IO の DO に対する所有関係を表す。この V 'e' は DO を統率し、DO に内在対格を付与する。

また同様に、DCの統語構造を以下のように仮定した。

(11) a. He INFL give a doll to the girl (= (7a))

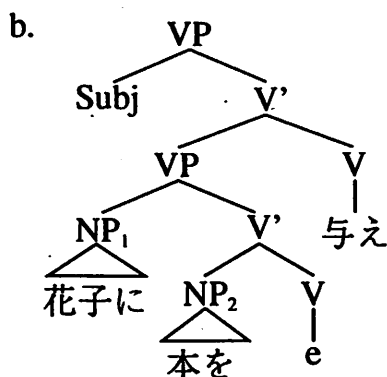


(11b)において、VP内主語仮説に従い、上のVPの指定部に主語の基底位置を設けている。

上のVはVP補部を取り、そのVPの指定部はO 'a doll'の位置である。このVはOを統率し、Oに構造対格を付与する。下の空のV 'e'は格付与のために存在するのではなく、OのPP 'to the girl'に対する所属関係を表す。

Katsuyama (1999)に従い、仮に日本語のDOCの統語構造を示すならば、以下のようなになる。<sup>3)</sup>

(12) a. 太郎が<sup>s</sup>花子に本を与え INFL



(12b)においても、空のV 'e'は所有関係を表している。

## 4. 検 証

英語の DOC に関しては Barss and Lasnik (1986) において相当な検証がなされていて、本稿においてもそれを採用しているので、本節においては日本語の DOC が本当に DOC であるのか、あるいは実際は DC であるのかを検証してみたい。

### 4.1. 能動文と受動文

日本語の研究において、格助詞と後置詞の区別は重要である。しかし、能動文におけるある範疇が受動文においては別の範疇である場合が多々ある。次の例を見てみよう。

(13) 花子が太郎に本を取られた。

能動文における NP という要素のみが受動文の主語になることができる、と一般的に考えられている。しかし、上の (13) の例はその反例であり、この例に対応する能動文は以下のものしかありえないのである。

(14) 太郎が花子から本を取った。

(13) の受動文中の「花子が」は明らかに NP であるが、(14) の「花子から」は明らかに PP (postpositional phrase: 後置詞句) である。

例をもう1つ挙げることにする。

(15) 会社が多くの箱を運び込まれ (て迷惑し) た。

(15) に対応する能動文は以下の通りである。

(16) 太郎が会社に多くの箱を運び込んだ。

(15) の受動文中の「会社が」は NP であるが、(16) の能動文中の「会社に」は PP である。



以上から分かるように、能動文におけるある範疇が受動文においては別の範疇になる場合がある。

次に、DOC を見てみたい。

- (17) a. 太郎が花子に本を与えた。 (= (3a))  
b. 花子が本を与えられた。 (= (3b))  
c. 本が花子に与えられた。 (= (3c))

一般的な視点から判断すると、(17a)における IO「花子に」が(17b)において「花子が」になっているので、IOは NP である可能性が高く、(17a)における DO「本を」が(17c)において「本が」になっているので、DOは NP である可能性が高い。

しかし、問題は容易には解決しない。さらに次節において見てみる。

#### 4.2. 遊離数量詞

ある範疇と遊離数量詞の関わり合いにより、その範疇が NP であるのか、あるいは PP であるのかを決定することができる。

- (18) 太郎が学生に本を与えた。

上の例に関して、遊離数量詞を関わらせた例は以下の通りである。

- (19) a. 太郎が学生3人に本を与えた。  
b.\*太郎が学生に3人本を与えた。  
c. 太郎が学生に本3冊を与えた。  
d. 太郎が学生に本を3冊与えた。

(18a) が文法的であり、(18b) が非文法的であるということから、IO「学生に」は PP であるようである。一方、(18c) と (18d) の両方とも文法的であるということは「本を」は NP であるようである。

### 4.3. 検証結果と仮説

上の 4.1 と 4.2 から得られた結果を要約してみたい。

まず、(13)–(16)において見た通り、文を受動化すると、範疇が PP から NP に変化するという意味において、範疇は常に一定であるというわけではないということが分かる。

次に、(17c) と (19c, d) から判断すると、DOC における DO は NP のようである。一方、(19a, b) から判断すると、IO は PP であるようであるが、(17b) が文法的であるという言語事実をも含めて判断すると、IO は NP であるのか、あるいは PP であるのかという問題への明確な解答は得られない。日本語の DOC の場合には、受動化は NP であるのか PP であるのかという判断材料にはならないためである。

以上のことを総合的に考慮すると、DOC における IO は NP であるとも PP であるとも解釈することができるが、DO は NP であるとしか解釈することができないようである。

しかし、ここでもう一度、(19a) と (19c) を考察してみたい。以下に繰り返す。

(20) a. 太郎が学生3人に本を与えた。(=(19a))

b. 太郎が学生に本3冊を与えた。(=(19c))

(20a) と (20b) を平行的に捉えるならば、「学生3人に」と「本3冊を」の両方が PP であるという可能性もあるのではないであろうか。「に」と同様に「を」にも格助詞と後置詞の解釈があるのではないであろうか。実際、「学生3人に」と「本3冊を」の順序は大変類似している。

上の観察をもとにすると、DOC の IO と DO の両方とも NP とも PP とも解釈することができるということになる。IO と DO の両方が受動文の主語になれるような DOC の統語構造を考えると、解決法は1つしかなく、それは日本語の DOC には基底構造を2通り仮定することである。

以上の仮説を踏まえ、英語と日本語の DOC の統語構造を考えてみたい。

## 5. 統語構造

上の4節の検証から判断すると、日本語の DOC には2通りの基底構造

を仮定する必要がある。

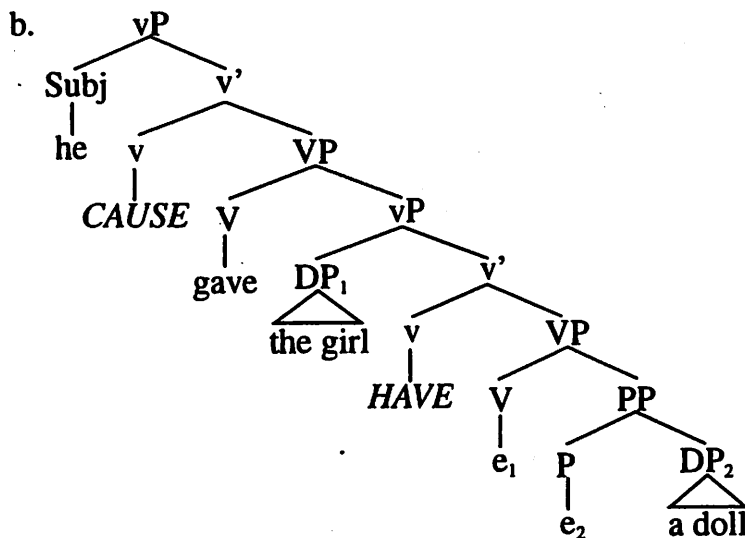
- (21) a. 太郎は花子に本を与えた。(= (3a))  
 b. 太郎は本を花子に与えた。<sup>4)</sup>

また、英語にも DOC と DC の2通りの表現がある。

- (22) a. He gave the girl a doll. (= (1a))  
 b. He gave a doll to the girl. (= (1b))

(21a) と (22a), また (21b) と (22b) は鏡像関係 (mirror image) にある。<sup>5)</sup> そして日英語を平行的に捉えるならば、英語の (22b) は DC なので、日本語の (21b) も必然的に DC であるということになる。また、4.3 において立てた仮説が妥当であるならば、(21a) の「を」は後置詞であるという解釈も成り立つ。さらに、(22a) が (21a) と平行的な関係にあると仮定するならば、(21a, b) と (22a, b) の全てが DC の統語構造、すなわち [V NP PP] という形式を持つことになる。<sup>6)</sup> 特に英語に関しては、Katsuyama (2002) において提案した DOC の統語構造を考慮に入れて明示すると、その統語構造は以下の通りである。まず、(1a) の統語構造を示す。

- (23) a. He gave the girl a doll. (= (1a))

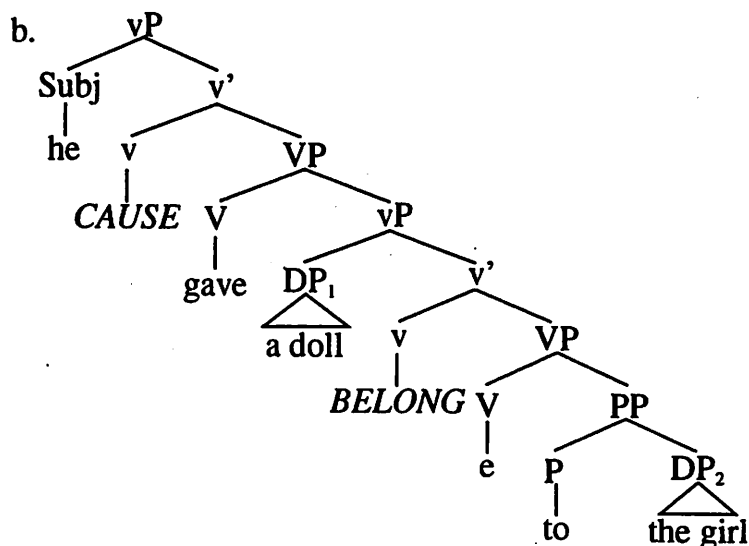


(23b) において、上の v は CAUSE の意味を持ち、下の v は HAVE の意味

を持つ。下の空の V 'e<sub>1</sub>' と下の空の P 'e<sub>2</sub>' は再分析され、1つの空の V として機能する。IO 'the girl' は DO 'a doll' に対して所有関係を持つ。それ故に、文全体は「彼がその女の子に人形を持たせた」という意味になる。

次に、(1b) の統語構造を示す。

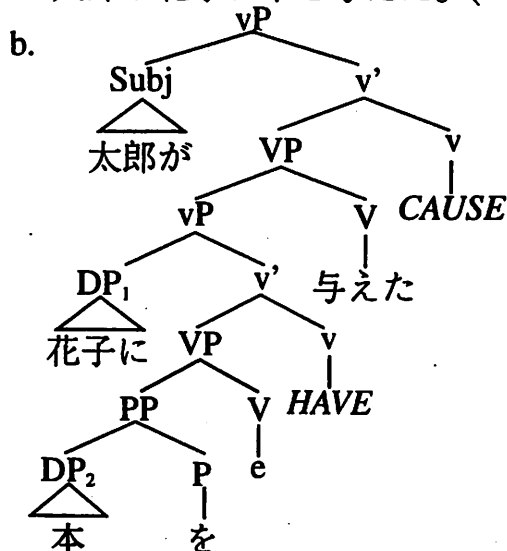
(24) a. He gave a doll to the girl. (= (1b))



(24b) において、上の v は CAUSE の意味を持ち、下の v は BELONG の意味を持つ。O 'a doll' は P の目的語に対して所属関係を持つ。それ故に、文全体は「彼が人形をその女の子に所有 (所属) させた」という意味になる。

(3a) の統語構造は以下の通りである。

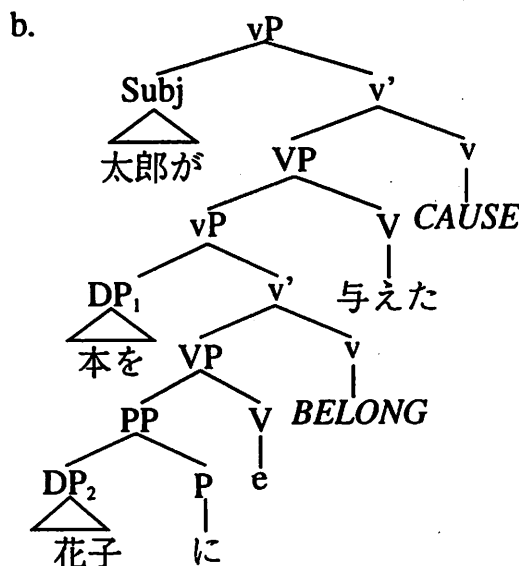
(25) a. 太郎が花子に本を与えた。 (= (3a))



(25b)において、上のvはCAUSEの意味を持ち、下のvはHAVEの意味を持つ。下のVP内のP「を」とV'e'は再分析され、1つのVとして機能する。IO「花子に」はDO「本を」に対して所有関係を持つ。それ故に、文全体は「太郎が花子に本を持たせた」という意味になる。

最後に、(21b)の統語構造を示す。

(26) a. 太郎が本を花子に与えた。(= (21b))



(26b)において、上のvはCAUSEの意味を持ち、下のvはBELONGの意味を持つ。IO「本を」はDO「花子に」に対して所属関係を持つ。それ故に、文全体は「太郎が本を花子に所属(所属)させた」という意味になる。

日英語のDOCは実際は全てDCであると仮定すると、(1c, e)と(3b, c)の受動文は最小連結条件 (minimal link condition: 以下MLC) に従い、それぞれの受動文の派生が綺麗に説明することができる。すなわち、Czepluch (1982) を引用した際に述べたように、英語においては間接受動文は派生されえるが、直接受動文は派生されえないのである。その代わりに英語には、(1b)の受動文である(1e)が存在する。一方日本語においては、間接受動文と直接受動文の両方が存在する。

そして、付加的に分かることは、日英語においては真の意味におけるDOCがなく、DOCもDCに還元されるために、これと同じ統語構造を持つ全ての三項述語構文が(23) - (26)のような構造で説明できることになる。三項述語構文とは以下のような文である。

- (27) a. The doorman showed the guests into the drawing room.  
b. 太郎は居間に友達を入れた。

一言でまとめると、(いわゆる DOC を含む) DC も結局は全て、三項述語構文と全く同じ構造を持つということである。

## 6. 結 論

最初に日英語の DOC の記述的特性を観察し、それから先行研究を概観し、その上で受動文と遊離数量詞に関連する格助詞と後置詞の区別に関して検証を加え、序論で提示したように、日英語の DOC は統一的に説明することができるということ、そして最終的には、DOC は実は DC と同じ構造を持ち、このことにより MLC との整合性が保証され、他の三項述語構文と平行的に扱うことができるということを確認した。二項述語構文の場合とは異なり、DC を含む三項述語構文の付加部はどこに位置するのかなど、いくつかの問題は残るが、今後 (いわゆる DOC を含む) DC に関する研究をさらに深めていきたい。

### 注

- \* 本稿は日本英語英文学会第 16 回研究発表会 (2006) における発表内容を修正し、発展させたものである。本発表会において貴重なご意見をくださった方々に心よりお礼を申し上げたい。
- 1) Donald L. Smith 教授は、直接受動文は現代アメリカ英語では通常は用いられない、ということ指摘してくださった。
  - 2) 便宜上、以下においても日本語における IO と DO を含む構文をも DOC と呼ぶが、結論においては、日本語の DOC とされているものは DOC ではない、ということを示す。
  - 3) 上の注 2 を参照のこと。
  - 4) (22b) に関してはかき混ぜにより、「本を」が「花子に」の前へ移動しているとの見方もできるであろうが、日本語においては間接疑問文と直接疑問文の両方が可能であるので、その見方を採用するためには MLC との整合性を視野に入れた上で、受動化における IO と DO の繰上げがかき混ぜ前に起こるのか、かき混ぜ後に起こるのかを、明示しなければならない。

- 5) 日英語の「鏡像関係」に関しては、Smith, D. L. (1978) を参照のこと。
- 6) Iwakura (1987) は英語に関して、そして Kajiwara (1989) はドイツ語に関して、DO は PP である、という可能性を示唆している。

#### 参考文献

- Aoun, J. and Y. A. Li. 1989. "Scope and Constituency," *Linguistic Inquiry* 20, pp.141-172.
- Barss, A. and H. Lasnik. 1986. "A Note on Anaphora and Double Objects," *Linguistic Inquiry* 17, pp. 347-354.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Chomsky, N. 2000. "Minimalist Inquiries: the Framework," in R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka, eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, pp. 89-155. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Czepluch, H. 1982. "Case Theory and the Dative Construction," *The Linguistic Review* 2, pp. 1-38.
- Iwakura, K. 1987. "A Government approach to the Double Object Construction," *Linguistic Analysis* 17, pp. 78-98.
- Jackendoff, R. 1990. "On Larson's Treatment of the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 21, pp.427-456.
- Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles Part III*. Copenhagen: Munksgaard 1927.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen and Unwin.
- Kajiwara, E. 1989. "On Double Object Constructions in German," *Linguistics Analysis* 19, pp. 232-242.
- Katsuyama, H. 1999. "A Thought on the Double Object Construction," *Ronshuu* 23 (*AGU English Studies*), pp. 55-68. Tokyo: The Department of English and American Literature, Aoyama Gakuin University.
- Katsuyama, H. 2002. "A Minimalist Analysis of the Double Object Construction," *Eibungaku Shichoo* 75 (*Thought Currents in English Literature* 75), pp. 39-58. Tokyo: The English Literary Society of Aoyama Gakuin University.
- Kuroda, S. 1979. "On Japanese Passives," in G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki, eds., *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, pp. 305-347. Tokyo: Kenkyuusha.
- Larson, R. K. 1988. "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, pp. 335-391.

- Larson, R. K. 1990. "Double Objects Revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, pp. 589-632.
- Oba, Y. 1993. "On the Double Object Construction," *English Linguistics* 10., pp.95-181.
- Palmer, F. R. 1988<sup>2</sup>. *The English Verb*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Smith, D. L. 1978. "Mirror Images in Japanese and English," *Language* 54, pp.78-122.
- Zandvoort, R. W. 1975<sup>7</sup>. *A Handbook of English Grammar*. Tokyo: Maruzen.